

佛教大学

仏教文化研究所報

第 4 号

昭和62年 6 月20日
発行

目 次

・フロンティア精神	坪井俊映 1
・『仏教経済哲学の構想』	勝木太一 2
・初期有部阿毘達磨仏教の状況(上)	樹田善夫 3
・補陀落渡海の基盤	妹尾匡海 6
・『須弥山儀』に就いて	佐藤友通 8
・『釈浄土群疑論』における別時意	趣会通について(その一)
・村上真瑞 10	
・ekam samayam と ekasmin samaye	の相違をめぐって—問題提起と作業報告(I)—
・中世における往生の「証」について	南清隆 11
・昭和61年事業報告・編集後記	笹田教彰 181613
・機について	大沢亮我 181613
・梵本『大正經』写本 Cat. No. 28	(M. 82. 83) に関する
・中間報告	吹田隆道 20

フロンティア精神

坪井俊映

私はこの言葉が大変好きです。フロンティアとは開拓を意味することばであって、常に新天地、新世界を求めて努力することであります。

かつて、アメリカのダラス市において凶弾に倒れた青年大統領ケネディが、大統領就任式において語った言葉に、「私たちは世界平和のためにフロンティア精神をもって立ち向っていかねばならない」と強く宣言しました。アメリカは御承知の通り、初めヨーロッパより移住した人々が次第に西部へすみ新天地を開拓し、あらゆる困難をのり越えて、ついに現在のごときアメリカ合衆国をつくりあげました。これは一に旺盛なフロンティア精神のしからしめたものと思います。

新分野、新天地の開拓には内外に亘って、つねに多くの困難がともないます。困難、苦労のない新分野新天地の開拓なるものはありません。困難や苦労をさけ逃げるようでは新分野の開拓はできません。困難と対決し、これをのり越えていくところに新分野新天地が開かれるものと思います。

『無量寿経』に法蔵菩薩が菩薩道を実践されたときの物語があります。これに「たといわが身をもろくの苦毒のなかに止むとも、わが行は精進して、忍んでついに悔いざらん」という厳しい修行に対する強い覚悟が説かれています。「さとり」を求める菩薩道を実践する道において、いかなる困難に遇うとも少しも後悔することはありませんという強固な意志を表示されたものであって、「さとり」という新天地を求め修行に励むフロンティア精神をいわれたものと思います。

学問研究の世界においても同様です。難解であるから、なか／＼ムツカしいから研究し勉学に励むのであって、十分に解っているならば、いまさら研究し勉学する必要はありません。「解からないから」解るまで強学するのであり、難事であるからますます意欲を強くしてそれを解明すべく努力することが研究の道において大切ではないでしょうか。かくて努力し励むところに新分野が自から開かれ、新知識を得ることができると思います。この心構えがフロンティア精神といえましょう。

一篇の論文、一冊の著書を仕上げたときの喜びは、実際ペンをとって書いたもののみが味あうことの出来る喜びであって、その味あいは正に醍醐味ということが出来ます。しかしそれは結果であって、それに至るまでの苦労は大変なものです。旺盛なフロンティア精神がなければ成就しません。これには老若男女、先輩後輩の別はありません。したがって、フロンティア精神をもって、つねに仕事にあたる人は万年青年と称してもよいでしょう。

かつて、ある書道の大家より聞いた話です。「自分はいま中国語の勉強をしています。一般にいわれることに、人間は五十才を過ぎると記憶力がおとろえて、語学は到底無理だということです。自分はいま中国語の勉強が、どうか、やっています」とそして毎週中国語の先生を招いて会話の勉強に励まれたということです。その後のことは伺っていませんが、六十数才になって然も書道においてよく知られた大家の言葉です。

その道の大家になっても、なおかつ中国語の勉強に励まれる心意気には敬服します。これは日中国交の初まるときのことでですから中国語の必要を感じて、かかる心構えをもたれたものと思います。日中友好による新世界との接触のために年令を問わず、身分を問わず、中国語の勉強にとめられることは、自己の内なるものに對するフロンティア精神だと思います。普通フロンティア精神といえますと外部より来る困難、他なるものに對する開拓精神と思われれますが、自己の内なるもの、障害せんとする内なる心に対するフロンティア精神こそが仕事の完成、研究成就のために必要ではないでしょうか。